九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

平安朝漢文学研究会編『平安朝漢文学総合索引』

今西, 祐一郎
九州大学助教授

https://doi.org/10.15017/11949

出版情報：語文研究. 65, pp.61-61, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

≪紹介≫　平安朝漢文学研究会編

『平安朝漢文学総合索引』

今西祐一郎

「本書は、平安朝初頭以降、鎌倉初頭以前に成った日本漢文学作品に見える語彙の中、日本人名・外国人神仏名・官職名・地名・建造物名・書篇名・詩題・年紀の八部門につき、各個別に作製した索引である」（本書「総記」）。対象として採用された作品は正続群書類従、国史大系、日本古典文学大系をはじめ図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩集』などなどに収まる諸篇、総集・別集・朗詠類・詩合・散文あわせてその数四十に及ぶ。

　編者、平安朝漢文学研究会の会員は、今井源衛氏を代表とする、迫徹朗、荒木尚、福井迪子、西丸妙子、金原理、後藤昭雄、森下純昭、工藤重矩、田坂憲二、田坂順子の十一氏。「会員著書紹介」という本欄の趣旨に沿って、今、福井氏以下の九州大学国文学会会員についてのみいえば、諸氏いずれも今井源衛氏の門に出で、和漢にわたって平安朝文学を専攻する中堅の研究者である。就中、金原、後藤両氏にはそれぞれ『平安朝漢詩文の研究』、『平安朝漢文学論考』の重厚なる著書が備わり、また田坂（順）氏は『扶桑集索引』の編者を兼ねる。今井氏の監修のもと、これら平安朝漢文学専攻者の力量が本索引の作成に遺憾なく発揮されたであろうことは想像にかたくない。しかし、本書はたんに漢文学研究のためだけの索引ではなかった。歌人が文人を兼ね、歌壇が詩壇と重なることの少なからぬ平安朝文学、なかでもその要素の強い歌人伝、私家集の研究に従事してきた福井、西丸以下の諸氏にとっても、この索引作成の作業は充実したものであったにちがいない。こうして出来上ったこの索引は、したがって、漢文学研究者を利する書である以上に、和歌、和文の研究者にとって漢文学の世界をのぞく窓としての大きな意義をもつ書となるであろう。

　平安朝文学が「和」のみ、あるいは「漢」のみではなく「和漢」の学であるという認識は、「和漢比較文学会」の設立とその活発な活動に象徴される通り、ますます大きな学界の潮流となってきた。期せずしてこの時期に本書のごとき恰好の索引を学界に提供すべく、夙くより意を用いてきた編者の慧眼に敬意を表したい。

　いうまでもなく索引とは便利重宝の書物であるけれども、それを縦横に活用し成果を挙げるには、それ相応の力量を必要とする。索引はみずから作成してこそ、使いこなすことができるのだ、とも言われるゆえんである。この『平安朝漢文学総合索引』は、いかに実際の研究に供されるべき書であるか——この点については、論より証拠、本書の編者によって、本書を利用して成された業績が何よりの道しるべであろう。その一、二を紹介すれば、まずは今井源衛氏の「かぐや姫の面影——「姮娥」と「少女」——」（梅光女学院大学「日本文学研究」第二三号）。これは仮名文献の側からはほぼ資料の出つくした観ある『竹取物語』について、漢詩漢文の側から平安朝の『竹取物語』享受のあり方を窺おうとするもの。また工藤重矩氏は昨秋（昭和六二年十一月）の和漢比較文学会において「平安朝における官職唐名の文学的側面」と題する発表で、平安朝漢詩文の従来あまり顧られなかった「あや」の一面を照らし出した。いずれも本書使用の「手引き」として参照欠くべからざる成果である。

（昭和六十二年六月、吉川弘文館、菊判、七八〇〇円）